

土の香りの救世主

星野 有加里 静岡県島田市 四十歳

「先生、食べて！実習でパワーランチを作ったよ！野菜も西瓜も私が育てたの！今朝収穫した採れ立てだよ！食べれば元気百倍！」
夏休み明けの昼休み。職員室に現れた女生徒は、得意満面にカレーと西瓜に乗った盆を私の机に置いた。

「野菜も沢山入っておいしそうね」笑顔で返しつつ、内心かなり動揺していた。

…どうしよう、実はダイエットに失敗して拒食症だなんて、生徒には言えない。カレーなんて、今の私にはハードルが高過ぎる。

…でも、私は知っている。小麦色に焼けた彼女のひと夏の苦労を。夏休み中、農高の生徒は農場に日参し、灼熱の太陽の下、汗だくで懸命に野菜や果物の世話をしていた。普通の高校生が海や街で青春を謳歌している間、この子達は土まみれの手に愛情を込め、この茄子やトマトや南瓜や西瓜を育てていた。だから、野菜も西瓜もこんなに瑞々しく育ったのだ。そんな健気な姿を思い出したら…

ええい、これでも教育者の端くれだ！

意を決し、「いただきます」と一口食べた。太陽の恵みを存分に享受した夏野菜の円やかな甘みが、鈍っていた味覚を呼び覚ます。

「おいしい」思わず感嘆を漏らすと、彼女はほっと笑った。

「良かった！先生、激ヤセしちゃったから心配してたんだ」

「心配かけてご免ね。お蔭でパワー充填！午後の授業も頑張れるわ！」

生徒の温かな優しさと、土の香りを放つ新鮮なランチに救われ、枯渇していた私の心身は再び息を吹き返した。